慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新しき「白鳥の騎士」物語 : 中世後期ドイツ叙事詩『ロレンゲル』をめぐって
Sub Title	Eine neue Schwanrittergeschichte : Über die spätmittelalterliche deutsche Epik ,,Lorengel"
Author	會田, 素子(Aida, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2005
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.88, (2005. 6) ,p.263(48)- 280(31)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00880001-0280

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新しき「白鳥の騎士」物語
—中世後期ドイツ叙事詩『ロレンゲル』をめぐって—

會田　素子

1．はじめに

白鳥の曳く小舟に乗って現れる騎士、すなわち「白鳥の騎士」は、19世紀ドイツのリヒャルト・ヴァーグナーによるロマン的歌劇『ローエングリン』の主人公としても著名であるが、それは中世以来連綿と受け継がれている主題である。元来の「白鳥の騎士」主題の物語とは以下のようなものである。

ある領主が死の直前、娘である姫と領地の保護を臣下に委ねる。その後その臣下は、約束では姫を妻に娶り自身がその地を治めるはずであったと言って、姫を結婚の不履行で訴えてしまう。訴えは皇帝に届き、裁きの庭が開かれる。そこで下された判決は、姫が自らの潔白を証明するために代理の闘士を見つけ出し、決闘裁判に臨まなければならないというものであった。闘士を見つけることができない姫のもとに、白鳥によって曳かれる小舟に乗って一人の騎士が現れる。彼は自身の出自に関する問いかけを姫に禁じ、問いかけをしないと約束させたうえで、決闘に勝ったあかつきには彼女と結婚し国を治めることを約束する。騎士は決闘に勝利する。騎士は姫と結婚し、幸福な生活を送る。しかし、夫の出自への不安を抱かされた姫は問いかけの禁止を破ってしまう。騎士は自分が聖杯城主パルチヴァールの息子ローエン

グリンであると名乗り、再び聖杯城へと戻っていく。

このような伝統的「白鳥の騎士」物語の典型とは、作品ごとに大小の相違はあるものの「白鳥の曳く小舟に乗って現れる正体不明の騎士による姫の救援、問いかけの禁止、姫による発問、騎士の辞去」などの話素を共通して含むものであり、文芸作品では 12 世紀フランスの十字軍武勲詩群の中に収録されている『白鳥の騎士』(‚Le Chevalier au Cygne‘) が最も古いと考えられる[i]。しかし、前述のヴァーグナーによる歌劇の影響もあって、現在著名となっている「聖杯— Gral のこと：聖石とされる場合もあるが、本論文では便宜上一般に通用している「聖杯」とする—とかかわりを持つ白鳥の騎士」は、中世ドイツ文学作品に由来するものである。現存する最古のドイツにおける「白鳥の騎士」主題の物語といえば『パルチヴァール』(‚Parzival‘) の結末に記された「ロヘラングリン (Loherangrin) の物語」を挙げることができよう。『パルチヴァール』(1200-1210 年頃) は 13 世紀ドイツにおいて活躍したヴォルフラム・フォン・エッシェンバハによる叙事詩であり、彼は「白鳥の騎士」物語を、フランスの十字軍武勲詩群から『パルチヴァール』の結末部分に移入したものと思われる。その際、ヴォルフラムはフランスの十字軍武勲詩の「白鳥の騎士」が持ち合わせていなかった二つの特徴を付与した。それが「聖杯城主パルチヴァールの息子」という出自と、「ロヘラングリン」という典型的な名称である。

これ以降ドイツの「白鳥の騎士」は独自の作品の系譜を紡いでいくこととなるが、現在存在が確認されているドイツで成立したこの主題を持つ文芸作品のうち、中世期では最後の叙事詩が本論文で論じることとなる 15 世紀後半成立の『ロレンゲル』(‚Lorengel‘) であり、この作品は他とは異なる新しき結末を持っている。

2.『ロレンゲル』の梗概およびその新しき結末

『ロレンゲル』の内容とその革新性を論じるにあたり、まず初めにそのあらすじを以下に述べておく[ii]。

プラファント（Prafant: ブラバント）公は死の直前、領地と娘イシリエ姫（Isilie: 他に Else という表記例もある）の保護を臣下であるフリーデリヒ（Friderich von Dunramunt）伯にお託しになった。その後フリーデリヒは公が自分とイシリエとの結婚を約束したと言って彼女にその履行を迫るが、イシリエは彼とは身分が異なることを理由に結婚を拒絶する。彼女は結婚の不履行を理由に、伯によってローマ皇帝に訴えられ、決闘裁判に備えて代理の闘士を立てなければならないという判決を受ける。伯に勝るような闘士を見つけることができない姫は、神に助けを求める。（写本一葉欠落）その頃、聖杯城では何者かが助けを求めているという合図の鐘が鳴る。そしてグラール（Gral:「聖杯」あるいは「聖石」）はパルツェファル（Parzefal）の息子、若きロレンゲル（Lorengel）を闘士に選び出す。出発の準備をしているところへ小舟を曳いた一羽の白鳥が現れ、彼はその小舟に乗って旅することにする。「天使の化身」だというその白鳥は、ロレンゲルをアントルフ（Antorff: アントワープのこと）に運ぶ。上陸後、都市民らの歓待を受けた際、ロレンゲルは当地のイシリエ姫に仕えるヴァルデマル（Waldemar）家の者たちの話を聞き、面会する。ヴァルデマルはかつて共に異教徒と戦ったパルツェファルとこの騎士が似ていることに気付き、関係を尋ね（この問いに対しての回答はない）、かつての冒険を語る。その冒険とは、異教徒の王エッツェル（Etzel）がケルンに攻め入った時、パルツェファルがその手にグラールを携えてやって来て、キリスト教徒を救ったというものであった。（写本三葉欠落）再度小舟に乗って現れた騎士をプラファントのイシリエ姫は迎える。そしてロレンゲルは「自身が神より遣わされた勇者である」と語る。彼をもてなす饗宴が開かれ、イシリエはロレンゲルになぜ決闘裁判をするに至ったかを語る。一方フリーデリヒ伯は皇帝のもとに参じていた。そこへ一人の使者が現れ、姫のもとに勇者が到着したことを伝える。伯はロレンゲルらの様子を見にやって来る。皇帝のもとに戻った伯はイ

シリエのもとに現れた騎士について報告し、裁きの庭が整えられる次第となる。決闘裁判の日、着々と両者の準備が整う中で、伯の軍馬の見事さに比べ、ロレンゲルの軍馬は優れていながらも彼を担うに耐えないものであることは周囲の観衆にも明らかであった。イシリエはそれを嘆き、聖母マリアに祈った。すると神はご自身の駿馬をロレンゲルのもとへお遣わしになった。そうして一騎打ちは始まる。槍による激戦の末、最後には剣による闘いとなり、ロレンゲルが伯の兜の緒を断ち切って深き傷を負わせる。命乞いをする伯であったが、ロレンゲルは姫への「誠の心」を破った伯を助けることはしなかった。伯のもとへは司祭が連れて来られ全ての人の前で告解が済まされると、死刑執行人の手によって伯は処刑される。勝利を収めたロレンゲルはイシリエと結婚し、結婚の饗宴は四週間にわたって続いた。その後二人は立派に領地を治め、賞賛のうちに幸福に暮らした。物語は最後にフリーデリヒ伯のごとくに宣誓を破ることをしないようにと人々に諭す。そして神への道をお進みになれば神のご慈悲が贈られるであろうと言って締めくくられる。

このような筋で『ロレンゲル』の物語は展開する。大筋は他の「白鳥の騎士」主題の作品と共通するものの、「問いかけの禁止」といった重要話素が欠落していることからも、おのずと結末が変化することが予想される。通常は白鳥の騎士の聖杯城への旅立ちの場面で物語が締めくくられるが、当該作品ではロレンゲルとイシリエを賞賛して終わっている。以下に「白鳥の騎士」物語の系譜の中では画期的である結末の原因と思われる、『ロレンゲル』の成立と伝承などを、同主題の他作品との比較を交えつつ論じていきたい。

3．『ロレンゲル』成立とその典拠

『ロレンゲル』という作品自体は他の「白鳥の騎士」主題の作品と比較しても、紹介される機会が少ないため、ここに成立と伝承を紹介しておく

ことは無駄ではないであろう。

『ロレンゲル』の作者や成立年代は確定されていないものの、推測の範囲において作者は宮廷騎士文学に関するある程度の知識を備えていながらも、あまり洗練されていない様式などから市民階級に属する者であったと推測されている[iii]。『ロレンゲル』を伝える二種の写本が 15 世紀後期に書かれているため、作品がそれ以前に成立したことは確かである。

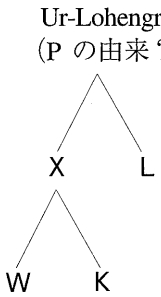
『ロレンゲル』を伝える二種の写本のうち、より古いものが「コルマール歌謡写本」(Kolmarer Liederhandschrift: K 写本) と呼ばれるもので、1470 年頃にドイツ中西部のマインツかその近郊で成立したとされている[iv]。これは当時隆盛を極めた職匠歌人 (Meistersinger) の教科書的な写本であり、編纂意図は様々な「調べ」(Ton) で歌われた作品を収集するところにあった。『ロレンゲル』も「クリングゾールの黒い調べ」という題の箇所に含まれている[v]。物語は抜粋で冒頭部分 41 詩節が書かれているが、冒頭に書かれている「350 詩節の歌のうちの一部」[vi] という一節が事実であるとすれば、本来 350 詩節の物語から K 写本の編纂者が冒頭の 41 詩節のみを抜粋したことになる。他写本では 207 詩節で物語が完結していることから、K 写本の編纂者が主張する「350 詩節の『ロレンゲル』」が実在していたならばその結末は先述の梗概とは異なるものであった可能性もある。

「コルマール歌謡写本」よりもやや新しいとされるのは「ピアリスト写本」(Wiener Piaristenhandschrift: W 写本) と呼ばれる写本である。19 世紀にヴィーンのピアリスト会修道院で発見されたことからそう名づけられた。1480 年から 90 年頃に一人の手によって筆記された紙写本で、オーストリア国立図書館に 15478 番写本として収蔵されている。

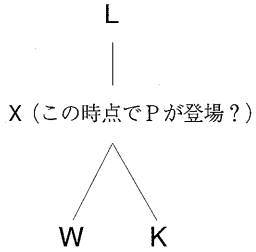
この写本には『ロレンゲル』を含めて七作品が収められており、『ロレンゲル』を宮廷騎士文学と考えて除外すると、他の六作品すべてが英雄叙事詩に分類される。そのことから「ピアリスト写本」は別名「リーンハルト・ショイベルの英雄叙事詩本」(Lienhart Scheubels Heldenbuch) とも呼ばれている。この名は写本を一時期所有していたと推測されている、1500 年前後のニュルンベルクに居住していた市民にちなんで名づけられたもの

だが[vii]、英雄叙事詩本（Heldenbuch）に分類される写本がこの他にも多く存在し、それらの収録作品がほぼ共通している中でも、『ロレンゲル』を含んでいるのはこの「リーンハルト・ショイベルの英雄叙事詩本」のみである。当該写本における『ロレンゲル』の存在は、写本制作依頼者、あるいは写本編纂者が『ロレンゲル』収録を望んだのではないかということを窺い知らせる。また、一時期であるとしても写本を所有していたのが「市民階級に属していた者」であるということは、中世から近世への過渡期において既に文学受容が貴族階級に限らず、都市の富裕層にも浸透していたという歴史的事実を裏書するものである。

上記の写本二種は、ほぼ共通した『ロレンゲル』の内容を伝承している。「コルマール歌謡写本」（K とする）の 41 詩節が「ピアリスト写本」（W とする）の第 5 から第 56 詩節目とほぼ重複していることから、両写本は共通の原典（存在未確認: X とする）を使用したというのが通説である。また、『ロレンゲル』は 13 世紀に成立した叙事詩『ローエングリン』（‚Lohengrin‘: L とする）の一部とも重複する。このようなことから、それぞれの典拠関係が興味深い問題となる。更に『ローエングリン』の冒頭は、それより以前に成立したとされる論争詩『ヴァルトブルクの歌合戦』（‚Der Wartburgkrieg‘）の一部と重複していることから、典拠関係はますます複雑になってしまう。ここでは二者の論を簡単に紹介するに留めておく[viii]。



エルンスト・エルスター説



トーマス・クラーマー説

まず、エルンスト・エルスターによる説であるが、彼は W、K には存在するが、L にはない詩節（Plusstrophe と呼ぶ）の存在原因は、「X と L 両者が原典としたであろう『ヴァルトブルクの歌合戦』に含まれていた

かもしれない『原ローエングリン（Ur-Lohengrin）』から、L のみが改作した際に見落としたものが X を経て W、K に残されたことにある」と推論した。

一方トーマス・クラーマーによる説は、エルスターの説に反対して「Plusstrophe（P とする）の由来は W、K が典拠とした存在未確認の X 自体に求められ、そう考えることにより、X が L の改作である可能性が十分にある」と結論付けている。

『ローエングリン』と『ロレンゲル』の成立には少なくとも 200 年の隔たりがあり、典拠関係があったとしても時間的な問題はない。また、K 写本における登場人物の名称が『ローエングリン』とかなり近いことから、私見ではクラーマーの説が有力に思えるが、更なる精査が必要であり、これについては別稿で検討したい。

このようにして『ロレンゲル』は、さまざまな作品の影響を受けて成立したと推測されている。特に叙事詩『ローエングリン』との緊密な関係は、先述した冒頭の重複部分からも想像可能である。しかし、60 詩節あたりで両作品の筋は異なる展開を見せる。『ローエングリン』は「白鳥の騎士物語」の基本的なあらすじを枠にして、主人公ローエングリンと異教徒との闘い、皇帝の年代記などを挿入話的に語りながら、問いかけの禁止の破綻を経て、白鳥の騎士の聖杯城への帰路の旅立ちを描いている。一方『ロレンゲル』にはその「問いかけの禁止」のモチーフが欠如しており、幸福な結末を迎えることとなる。この画期的な結末こそが、『ロレンゲル』が他のドイツの「白鳥の騎士」主題の作品と一線を画する所以となっている。この点を踏まえ、次にドイツの「白鳥の騎士」主題の物語と『ロレンゲル』との相違点を比較考察する。

4．『パルチヴァール』に見るドイツにおける「白鳥の騎士」の典型

「白鳥の騎士」主題を持つ作品でドイツにおいて最古のものは、今日知られている限りではヴォルフラム・フォン・エッシェンバハによる『パル

チヴァール』結末部分の「ロヘラングリンの物語」であることは既に述べたが、この作品で「白鳥の騎士」を主人公に据えた物語と、パルチヴァールを主人公とするいわゆる「聖杯物語」との融合がようやく本格的になされた。以後ドイツで誕生し、伝承された「白鳥の騎士」主題の諸作品においては、白鳥の騎士は「聖杯城主パルチヴァールの息子」と設定されることとなる。この点がフランスの十字軍武勲詩や、それを原典として書かれ、イギリスやイタリアで流布した「白鳥の騎士」物語[ix]とは異なる点と言うことができる。

『ロレンゲル』においてもこの特徴は確実に踏襲されているのだが、ドイツの「白鳥の騎士」物語に特徴的な主人公の出自と聖杯との関係とは以下のようなものである。

1. 主人公は聖杯城主パルチヴァールの息子である。ヴォルフラムによる『パルチヴァール』以外では「聖杯城主」との明確な記述は特にないが、一般に「聖杯物語」ではパルチヴァールと聖杯との関係は近いものに描かれている。
2. 主人公は「聖杯」が下す命令に従い、危機に瀕した姫君のもとへ向かうことが決定される。

このようにしてドイツに移入された後に「聖杯」と深い係り合いを持つ形式へと確立された「白鳥の騎士」の物語の伝統は、独自性を兼ね備えた上で各々の作品へと発展していった[x]。しかし、ヴォルフラムが「白鳥の騎士」をなぜ「聖杯物語」に挿入したのかについては、未だ確固とした論拠が見つけられていない。ただし、『パルチヴァール』にはその理由に結びつくかとも思われる以下のような一節がある[xi]。

…聖杯の城では高い家柄の姿美しい少年をお召しになるが、また、他方ではどこかの国で主君が亡くなった場合、住民が神のお力を信頼して新しい主君を望むと、聖杯の騎士団の中から主君が選ばれ、この主君に恭しく従うことになるのだ。すると恵み深い神がお守りになる。

この聖杯の機能について述べられた部分は、ヴォルフラムの『パルチヴァール』との典拠関係が推測されている、12 世紀後半にフランスで創作活動をしていたクレティアン・ド・トロワによる『ペルスヴァル』(‚Perceval‘) にはないものであり、ヴォルフラムの創作であると言える。このような一節の存在意義を考察した場合、二つの可能性が考えられる。第一に、結末に「ロヘラングリンの物語」を加えたいがために[xii]、その伏線として上記のような聖杯の機能をヴォルフラムが創作したと考えられ、第二には、聖杯の機能にあらかじめこのようなものを書き加えていたがために、その例として「ロヘラングリンの物語」を結末部分に挿入することによって物語を締めくくったということが考えられる。

また、ロヘラングリンに対してブラバント公女が「すべきでない問いかけ」とパルチヴァールが聖杯城主アンフォルタスに対して「すべきであった問いかけ」を対峙させる向きもある[xiii]。この考えに従えば、「問いかけの怠り」を問題視する「聖杯探求の物語」(『パルチヴァール』など) と「問いかけの禁止」が重要モチーフである「白鳥の騎士物語」(フランスの『白鳥の騎士』など) の両者に共通した「問いかけ」がヒントとなってヴォルフラムが「聖杯」と「白鳥の騎士」を結び付けたのではないかとも推測できる。『パルチヴァール』の聖杯城における「問いかけの怠り」と、ブラバント公女に課せられた「問いかけの禁止」との間にはあまりにも大きなウエイトの差が存在するため、この両者を対比させる説に全面的に賛同することには躊躇も感じられるが、仮にこの見方が正しいとすれば、同じ「問いかけ」という行為も、それが他者に対する憐憫・愛からなされてこそ肯定され、自己の安泰・利益のためになされるならば、それは破局を招くというモラルが長篇叙事詩を貫いているという理屈になる。

以上が『パルチヴァール』への「ロヘラングリンの物語」受容の契機とも考えられる要素であるが、すべては推測の域を出ないものである。

これまでドイツにおける「白鳥の騎士」物語の典型について、主にヴォルフラムによる『パルチヴァール』を代表例として論じ、「聖杯物語」と「白鳥の騎士」がどのような接点を持っているかを考察した。『ロレンゲル』

の主人公は、中世ドイツの他作品の「白鳥の騎士」と同じく「聖杯」との関係を持っている。主人公ロレンゲルは「聖杯」のもとに住み、それを守護する騎士団の一員であり、父はパルツェファル（ヴォルフラムによるパルチヴァールと同一人物と見てよい）である。そして「聖杯」の下す命令によって、イシリエ救援の騎士に選ばれる。このようにして、時代は 15 世紀後半まで下るものの『ロレンゲル』も、他のドイツの「白鳥の騎士」物語と同様に「聖杯物語」と密接に関係しており、一見すると典型的なドイツの「白鳥の騎士」物語の系譜に連なるように思われる。しかし、重要な点で『ロレンゲル』は他作品と異なっている。その点とは、本来「白鳥の騎士」物語には不可欠な「問いかけの禁止のモチーフの欠如」であり、これによって『ロレンゲル』の結末も大きく変わることとなる。

5．『ロレンゲル』における「問いかけの禁止」モチーフの欠如

一般的な「白鳥の騎士」主題の物語の中でも最も重要な要素は、「問いかけの禁止」とそれに付随する「禁止の破綻による二人の別離」のモチーフである。それらが欠落していることによって、いかなる特徴的な結末を『ロレンゲル』は得ることとなったのであろうか。

「問いかけの禁止」のモチーフはドイツばかりでなくフランスの十字軍武勲詩中の「白鳥の騎士」物語にも存在する。元来神話や伝説において、人間と異界の存在との婚姻、いわゆる「異類婚」を主題とする場合には何らかの「禁忌」のモチーフが欠かせないが、幾つかの版が見られるフランス十字軍武勲詩中の「白鳥の騎士」物語のうちでも古形のものにおいては、主人公と救済される姫の結婚が「異類婚」であると言うことができる[xiv]。そして一般に「問いかけの禁止」が破綻した後には白鳥の騎士による出自の告白が続き、再び現れた白鳥が曳く小舟に乗って騎士は去っていく。『ロレンゲル』においては「問いかけの禁止」が欠如していることにより「婚姻の解消」のモチーフが失われ、主人公の二人は幸福な暮らしをおくったという記述で物語は締めくくられる。

元来主人公である「白鳥の騎士」の出自が伏せられていればこそ、これ

らのモチーフは成立するのだが、『ロレンゲル』では主人公が「パルツェファルの息子」であると周囲の人が了解していることを示唆する記述が第74 詩節に存在する。その一節はイシリエ姫に仕える廷臣ヴァルデマルによって発せられるものであり、彼はロレンゲルの面差しや姿の中に、かつて戦場で異教徒を駆逐した英雄の面影を見出し、次のように質問する[xv]。

> ヴァルデマルの殿は尋ねた。「さあ、我々におっしゃられよ、気高く勇敢なる騎士よ、あなたは一人の高貴なる侯をご存知でおられるか？その侯は円卓をお守りしている方、そこではいかなる勇者も不名誉とともに暮らすということはないのです。ある者が恥辱や不名誉のもとにあらねばならない時、その時は一人の高貴なる優れた侯が、間違えに関して教え諭すこととなるのです。私の意見ながら、私には次のように思われるのでございます、お一人の名手の御手が、彼の跡を継ぐべく素晴らしきことにあなたをお創りになられたのではと。パルツェファルの殿と、人はその地でその騎士を呼んでおりました。」

ヴァルデマルのこのような質問に対して、ロレンゲルは回答しない。しかし、ヴァルデマルは目前の騎士が「パルツェファルの息子」であるという確信を得ているようで、かつてパルツェファルが活躍したケルンでの戦いについて語り出す。

こうして物語の中において示唆的ではあるものの、白鳥の曳く小舟に乗って現れた見知らぬ騎士（＝ロレンゲル）の出自は周知のこととなる。それにより「白鳥の騎士」の物語には本来必要不可欠と思われる「出自に関する問いかけの禁止」は不必要なものとなり、『ロレンゲル』から一連の「禁忌」に関するモチーフが消滅する。そして「問いかけの禁止」を破ることに付随して、結末部分におかれる「白鳥の騎士と姫君との別離」のモチーフもおのずと省かれてしまうのである。その代わりに採用されたのが、第 207 詩節に書かれている以下のような教訓的文言の結末である。

ここに私は一つの例えを皆様に申し上げたのでございます。お守りください、あなた様方が（フリーデリヒ）ドゥンドラムント伯のごとくには、宣誓を決してお破りにならないということを。彼には自身の不実ゆえに恥ずべき最期が起こったのです。

プラファント公亡き後の姫の保護を委ねられたにも関わらず、姫を自身の妻にして領地を入手しようとしたフリーデリヒ伯は、「臣下として」姫を守護するという「宣誓」を破ったがために滅びることとなった。この一文の後、『ロレンゲル』の筆者はそのような「宣誓違反」をせず神と通ずる道を進むようにと読者（あるいは聴衆）を諭して物語を締めくくっている。

「問いかけの禁止」の削除によって変化したと思われるこのような結末こそが、『ロレンゲル』が一般的な「白鳥の騎士」主題の作品と一線を画する要因である。元来「白鳥の騎士」の物語に存在するはずの最も重要な要素が消え去った理由を探ることによって、『ロレンゲル』の作者の制作意図も判明するのではなかろうか。

6．『ロレンゲル』における画期的結末に関する推論

それでは『ロレンゲル』のみに登場する幸福な結末は、いったいどのような理由から採用されたのであろうか。『ロレンゲル』創作の時点で既に作者が伝統的な「白鳥の騎士」主題の作品には欠かせない「問いかけの禁止」や悲劇的な結末について知らなかったということも考えられなくはない。しかし『ロレンゲル』には先述のように伝統的側面（「聖杯」との関係など）も含まれており、かつ本作品以外には幸福な結末で締めくくられる「白鳥の騎士」主題の作品が存在していないことからも、このような推論は正しくないと思われる。

ここでは特に、「ピアリスト写本」における『ロレンゲル』が新しき結末を得ることとなった原因と推測される二つの可能性を模索し、各観点からの考察を試みることとする[xvi]。

①作者の制作意図と当時の歴史的背景の観点から

「白鳥の騎士」と姫の幸福な結婚生活で物語が締めくくられている理由が、作者の制作意図及び歴史的事実と関係しているという説がある。この推論はハインツ・トーマスによって打ち立てられたものである。トーマスは「中世最後の騎士」と称えられ、自身も英雄叙事詩を愛読していたという[xvii]後の神聖ローマ皇帝マクスィミーリアーン一世とマリア・フォン・ブルグントとの結婚（1477 年）を祝うために、彼らの同時代人である作者によって、この物語が書かれたのではないかと推測し、作品中の記述と年代記などを照合し検証している。問題箇所は、伝統的な「白鳥の騎士」主題の物語には含まれていないものであり、ロレンゲルの父がパルツェファルではないかと察した老騎士ヴァルデマルが、かつてケルン一帯で起こった戦いについて述べる部分（第 74-86 詩節—ただしその後写本が三葉欠落しているため、この挿話の結末は不明）であるが、この戦いに酷似した状況がマクスィミーリアーン一世とマリアとが結婚した時期に実際に起こっているという。以下の相似点が挙げられる。

1. 戦いの原因: 『ロレンゲル』の中でヴァルデマルは、かつてケルン一帯で起こった戦いの原因は、ある伯が「ケルンの地の代官にして領主であると名乗ろうとした」ことで都市民の反発にあい、それに逆上した伯が異教徒をおびき寄せたことにあると言う。史実の方では、15 世紀に編纂されたケルンの年代記 ‚Koelhoffsche Chronik‘[xviii] の 1474 年の項に「ある公がケルンの参事会の代官であると名乗ろうとした」がケルン市民の反撃にあったという記述がある。
2. 人物関係の相似: ヴァルデマルは、伯によっておびき寄せられた異教徒の手からケルンの町を救ったのは、「姫を助けに現れたロレンゲルの父パルツェファル」であると語る。史実では 1474 年にケルン近郊のノイスが包囲された際、その町を救ったのが、「マリア・フォン・ブルグントと結婚するマクスィミーリアーン一世の父フリードリヒ三世」である。史実と『ロレンゲル』双

方における人物関係が酷似している。

3. マリアの父であるカール突進公の死後、彼女は数名の求婚者から結婚を迫られており、マクスィミーリアーン一世はイシリエを助けに現れた「白鳥の騎士ロレンゲル」さながらであった。

ハインツ・トーマスはこれらの史実と創作間の相似点を理由として、作者はマクスィミーリアーン一世らと同時代の人物であり、彼らの結婚を祝うためにマクスィミーリアーン一世を「白鳥の騎士」になぞらえて『ロレンゲル』を創作したのではないかと推論している[xix]。作者が結婚の祝賀のために当時人気のあった「白鳥の騎士」の主題を用いて『ロレンゲル』を制作したのであれば、他の「白鳥の騎士」物語のように別離の場面で物語を締めくくることは作者の意にそぐわないはずであり、幸福な結末を用意することが当然である。このような理由から、トーマスは作者の制作意図に新しき結末が由来していると推測している。つまり物語に当代の現実事件との直接的な関わりが与えられた瞬間に、そしてそれが慶事に因む限り、物語を破綻に終わらせることはタブーとなるのである。ここに我々は中世文芸の持つ社会的役割を見るべきであろう。

②写本編纂の観点から

歴史的事実との符合から『ロレンゲル』の作者が制作した時点で既に幸福な結末が採用されていたと考える他に、一つの推論をここに提示したい。作品が伝承される際に新しき結末を得るに至ったというものである。全四葉の欠落が見られるものの、「ピアリスト写本」は『ロレンゲル』をほぼ完全な形で今に伝えている。「ピアリスト写本」には七作品が収集されているが[xx]、それらはすべて英雄叙事詩的な性格を持つ。

ヴェローナのディートリヒ伝説や、最も著名な英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』などを収めたこの写本では、いずれの作品にも「宮廷的冒険、ミンネ、キリスト教的敬虔」と「花嫁の獲得」のモチーフが存在しているという[xxi]。これらのモチーフを持つ作品の収集こそが「ピアリスト写本」の編纂意図であったと考えた場合、それに合わせて『ロレンゲル』も改変されたという推論を導き出すことも可能であろう。他作品も考慮すれば、

『ディートリヒの初めての出征』(‚Dietrichs erste Ausfahrt‘) は全三種の写本に伝承されているが、そのうち Heldenbuch (英雄叙事詩本) と称される二種においては「主人公と高貴な女性の結婚」という幸福な結末で物語が締めくくられているのに対し、Heldenbuch と称されていない写本では主人公が結婚後に出征する場面で終わる。これと同様に写本編纂の段階で『ロレンゲル』も「花嫁の獲得」で物語が完結するように改変されたということも考えられるのではなかろうか。

7．結語

本論文では『ロレンゲル』の紹介と共に、改変された結末の典拠を制作意図と写本編纂という二つの観点に求めた。それらの観点のうち、いずれかがその要因となっている可能性は高いと思われる。結論を下すことは困難であるが、制作意図によって斬新的な結末を付与された後、その内容が「ピアリスト写本」の編纂意図にかなっていたがためにその中に収集されたとも考えられるのではなかろうか。いずれにせよ、制作者や受容者の意図が影響を及ぼしていたに違いない。

ヨーロッパ文学に広く足跡を残す「白鳥の騎士」主題の物語であるが、「問いかけの禁止」モチーフの欠如が見られ大団円で締めくくられる作品は、『ロレンゲル』のみである。伝統的な「白鳥の騎士」物語には欠かせないモチーフが欠如しているということには、極めて重要な原因があったのであろう。ドイツにおいて『パルチヴァール』以来、物語の根本的な部分が改変されることなく「白鳥の騎士」主題が連綿と伝えられてきたということは、この主題がいつの時代においても好まれていたことを証明している。しかし、『ロレンゲル』に見られるように、その主題は物語の「枠部」として使用されていたに過ぎないとも言うことができる。このような「白鳥の騎士」主題の受容状態を考慮することにより、中世の「白鳥の騎士」物語が依頼者や編纂者の嗜好の影響下にあったものであり、単なる「白鳥の騎士」物語としての位置づけでは済まされない、中世文学特有の社会性を付与されたものであったということが理解できるのである。

注

i *The Old French Crusade Cycle, vol.2, ‚Le Chevalier au Cygne' and ‚La Fin d' Elias'* edited by Jan A. Neison, The University of Alabama Press, 1985, S.xxvi-xxvii.

ii *Lorengel*, hrsg. v. E. Steinmeyer, in: Zeitschrift für deutsches Altertum 15 (1872), S.181-244. 物語が完結している「ピアリスト写本」校訂版。そのため梗概もそれに拠る。

iii *Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon*, Band 5, de Gruyter, Berlin/New York, 1985, S. 908. 『ロレンゲル』(‚Lorengel') の項は T. Cramer 執筆。

iv 一説にこの写本は 1459-1462 年の成立とされる。 a.a.O., *Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon*, Band 5, S. 31-32. 「コルマール歌謡写本」(Kolmarer Liederhandschrift) の項は I. Glier 執筆。

v 調べ (Ton) は考案者である詩人や使用された詩にちなんで名づけられた。「クリングゾールの黒い調べ (Klingsors Schwarzer Ton)」は 13 世紀の論争詩『ヴァルトブルクの歌合戦』で使用された。この Ton は 13 世紀末の叙事詩『ローエングリン』にも使用された。

vi 第 701 葉裏ページから書かれている『ロレンゲル』の表題は次のようなものである。*„Diß ist ein teile an dem Lorengel dez mit einander iiij lieder sint im swarzen tone"*「これは黒い調べで歌われたロレンゲルに関する 350 (詩節) の歌の一部である」

vii Lienhart Scheubel なる人物の存在の確認を試みたのはヴェルナー・ホフマンである。彼は写本に記された *„Das buech vnd bethschafft sol nymant hassen, Ist linharcz schewbels an der prayten gassen"* という覚え書きをもとに、Breite Gasse という通りが存在したニュルンベルクの中世から近世にかけての土地登記書や債務登記書などを調査し、1500 年頃に Lienhart Scheubel という人物がいたことを確認した。Werner Hoffmann : *Die spätmittelalterliche Bearbeitung des Nibelungenliedes in Lienhart Scheubels Heldenbuch*, in : Germanisch-romanische Monatsschrift 60. Band (Neue Folge, Band 29), Carl Winter Universitätsverlag, 1979, Heft 2, S.129-145 (bes. S. 131-132).

viii Thomas Cramer :*Lohengrin. Edition und Untersuchungen*, Wilhelm Fink Verlag, 1971, S.34-45.

ix イギリスには,Chevalere Assigne' (14 世紀)、,Helyas, Knight of the Swan' (16 世紀)、イタリアには,Historia della Regina Stella e Matabrune' (16 世紀) が残る。

x ドイツ語で書かれた「白鳥の騎士」物語としては、『ロレンゲル』の

他にヴォルフラム・フォン・エッシェンバハによる『パルチヴァール』、一説に Nouhusius 作の叙事詩『ローエングリン』(1285 年頃)、アルブレヒト作『新ティートゥレル』(1260/70 年頃)、ウルリヒ・フュートラー作『冒険の書』(1473/87 年頃) の中に含まれるものが挙げられる。また、19 世紀リヒャルト・ヴァーグナーによるロマン的歌劇『ローエングリン』も著名である。『新ティートゥレル』、『冒険の書』ではブラバント公女のもとを去った白鳥の騎士が再び結婚する物語が語られているが、上記の作品はすべてヴォルフラムの作品に従って、「白鳥の騎士」の父をパルチヴァールとしている。しかしドイツの作品でも「聖杯」と関わりを持たない例外となるものがある。コンラート・フォン・ヴュルツブルクによる『白鳥の騎士』(1250 年過頃) では白鳥の騎士がパルチヴァールや「聖杯」と関係があるといったことを示唆する記述は全くなく、「聖杯伝説」の一翼を担うドイツ系と言うよりむしろフランス系と言うことができる。『コンラート作品選』, 平尾浩三訳, 郁文堂, 1984 参照。

xi 『パルチヴァール』, 加倉井粛之他訳, 郁文堂, 1974, S.262。 第 494 詩節中の原文は: *„si enpfâhent cleiniu kinder dar / von hôher art unt wol gevar. / wirt iender hêrrenlôs ein lant, / erkennt si dâ die gotes hant, / sô daz diu diet eins hêrren gert / von des grâles schar, die sint gewert. / des müezen ouch si mit zühten pflegen: / sîn hüet aldâ der gotes segen.“* この一節は主人公パルチヴァールがおじである隠者トレフリツェントによって「聖杯」とその家系について明かされる語り (特に第 468-502 詩節) の一部である。主人公と聖杯の家系との関係、「聖杯」の由来、形状、機能などが語られ、更には聖杯城主への問いかけの怠りによってパルチヴァールが負った罪について語られる。

xii このように考えた場合、ヴォルフラムが「聖杯の物語」と「白鳥の騎士の物語」を結びつけた理由が一つ考えられる。『パルチヴァール』は冒頭主人公の父、ガハムレトの物語で始まる。ヴォルフラムが中世騎士文芸に見受けられがちな「枠物語構造」を用いようと意図していたなら、冒頭部分を主人公の父の物語で始め、結末部分を主人公の息子の物語で締めくくり、一種の枠形式の構成を施したと推測できる。

xiii Gustav Ehrismann: *Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters*, Zweiter Teil, Die mittelhochdeutsche Literatur II. Blütezeit, Erste Hälfte, C. H. Beck'esche Verlagsbuchhandlung, München, 1954, S.254-255.

xiv 「問いかけの禁止」のモチーフはドイツの「白鳥の騎士」物語が依拠するフランスの十字軍武勲詩や、それと近い関係があったとされるヨ

ハンネス・ド・アルタ・シルヴァによる『ドロパトス』(11 世紀後半成立:『ドロパトスあるいは王と七賢人の物語』, 西村正身訳, 未知谷, 2000 参照) の第七話「白鳥」にも登場するため、「白鳥の騎士」物語が中世騎士文芸以前に確立した時点で既に備わっていたと思われる。婚姻に際して「禁忌」を課すモチーフは元来「異類婚」に不可欠であり、古代インドのリグ・ヴェーダ中の『プルーラヴァスとウルヴァシー精女との対話』にも登場する。『ドロパトス』やフランスの十字軍武勲詩群の中でも古い版では、「白鳥の騎士」も泉のニンフと人間の王との間に生まれた子であり、妖精的な出自を持つ「白鳥の騎士」と危機に瀕した人間である姫との結婚は一種の「異類婚」である。また、ドイツの「白鳥の騎士」はニンフの子ではないものの「聖杯城の出身」ということが人間世界にとって見れば「異界の出身」であり、「問いかけの禁止」のモチーフもあって然るべきであると思われる。

xv 『ロレンゲル』Str.74 より拙訳。

xvi 「コルマール歌謡写本」も考察対象とすべきであるが、当写本は『ロレンゲル』の冒頭部分 41 詩節しか伝承しておらず、重要な展開を見せる場面まで到達していないため、ここでは物語を完結させている、「ピアリスト写本」の『ロレンゲル』のみを検証する。

xvii マクスィミーリアーン一世 (1459-1519, 在位 1493-1519) は英雄叙事詩を好み自ら英雄叙事詩 ‚Theuerdank' を創作、また英雄叙事詩本の Ambraser Heldenbuch (1504/17 年頃) を編纂させた。

xviii *Die Chroniken der niederrheinischen Städte. Cöln*, Dritter Band, hrsg. durch die Historische Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Vandenfoeck & Ruprecht in Göttingen, 1968, S.830.

xix Heinz Thomas: *Maximilian als Schwanritter. Zur Deutung und zur Datierung des ‚Lorengel'*, in: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 116 (1987), S.303-316 (bes. S.315-316).

xx 「ピアリスト写本」に収集されているのは、『ディートリヒの初めての出征 (ヴィルギナール)』Bl.2^{r}-155^{v}、『アンテロイ王 (アンテラーン)』Bl.157^{r}-159^{v}、『オルトニート』Bl.160^{r}-183^{v}、『ヴォルフディートリヒ』Bl.184^{r}-290^{r}、『ニーベルンゲンの歌、改作 k 版, 1.Teil』Bl.292^{r}-388^{r}、『ニーベルンゲンの歌、改作 k 版, 2.Teil』Bl.389^{r}-496^{v}、『ロレンゲル』Bl.497^{r}-516^{r}。

xxi Xenja von Ertzdorff: *Linhart Scheubels Heldenbuch*, in: Festschrift für Siegfried Gutenbrunner, hrsg. v. O. Bandle, H. Klingenberg u. F. Maurer, Carl Winter Universitätsverlag, Heidelberg, 1972, S.33-46.